
Detective Cat -Who am I?-

天海 沙月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D e t e c t i v e C a t - W h o a m I ? -

【Nコード】

N 3 2 6 4 D

【作者名】

天海 沙月

【あらすじ】

D e t e c t i v e C a t 第三弾。パーティー会場の客の中から、脅迫状の送り主を見つけるよう依頼されたクロ。館へ誘われたのは犯人なのか、それとも……。 （前作を読んでもいなくても大丈夫です）

プロローグ：悪夢の目覚めは黒猫と

一体それは、何百回目の悪夢だろう。

凄まじく密度の高い、重い空気が僕の肩に腰かける。

顔を上げた先には、人、人、人。

笑っている人、怒っている人、泣いている人。年代も性別もばらばらだが、一つだけ共通点があるとするならば、それらの表情は、それぞれ僕にとって最も辛く感じるものだということだろう。

けれど、僕は平気だ。何故なら、これが夢だと知っているから。

僕は何度も何度も同じ夢を見る。

そして、この夢に出てくる人は皆、僕が出くわした事件の関係者だ。中には未解決の事件だつてある。

そう　これらは全て、僕の奇妙な体質のせいだ。

事件招喚体質並びに事件邂逅体質。

平たく言えば、何らかの事件の現場に偶然出くわしてしまう。そんな体質なのだ。

ある人はそれを才能だと言い、

ある人はそれを災能だと言った。

まあ、当人である僕にとってはどっちであつてもさしたる興味はないけれど。

一つだけ、強いて良いところを挙げるとすれば、出くわした事件に巻き込まれて怪我をしたことだけは、一回もないということぐらいだろうか。

夢の中で僕は目を閉じる。夢の夢は現実。目を覚ますには夢の中で眠ればいい。

ん？

その時ようやく、僕は周りにいた人々が皆いなくなっていること

に気づいた。

足元を見ると、代わりに、黒猫が一匹。

なんでこんなところに黒猫が？

「！？」

覗き込んだ拍子に黒猫は僕の顔に飛び掛り、丁度僕の口と鼻がふさがり形になる。

黒猫を引き剥がそうと試みるが、相手はうめき声を上げる僕にはお構いなし。この夢は何度も見たことがあるが、こんな展開になったのは初めてだ。はつきり言っただけかなり苦しい。このままじゃ息が。

*

「ぶはっ」

「あ、起きた」

目を覚ますと、クロこと氷匏黒羽^{ひがの・くれは}が僕の鼻をつまんでいた。

そうだ。今日はクロの家に遊びに来ていたんだった。

しかし、寝ている無力な人間の鼻をつまむとは怖ろしい事を……。

「ずいぶんうなされてたわよ」

おそらく後半はお前のせいだな。うん。

クロに非難の目を向けながら、なるほどそれで黒猫か、と僕は納得していた。

氷匏黒羽は探偵だ。

怖ろしくマイペースなところが猫っぽかったり、黒い服を好んで着る事から、「黒猫」という異名を持つ。本当はこの異名は「不吉な黒猫」という皮肉な意味も持つのだが、そっちの由来は僕は好きじゃない。

夢の中で飛びかかってきた黒猫はまさに、こいつの事だったというわけだ。

ちなみに、僕は黒猫ではなく、氷匏黒羽という非常に読みにくい

名前から一字取って、クロと呼んでいる。その代わり、こちらも立たち森司狼もり・しろうの司狼を略されてシロと呼ばれてしまっているが。

まあ、その程度が丁度いいのかもしれない。

事件なんて生臭いものは、派手じゃなくて構わない。

だから、その事件に関わる者も、白黒モノクロなくらいで丁度いい。

プロローグ：悪夢の目覚めは黒猫と（後書き）

前作から大幅に間が開いてしまい、申し訳ないです（汗）
この小説はシリーズ三作目となっておりますが、前作を読んでいなくても大丈夫です。

一話：探偵は依頼される

それは、まったく奇妙な話だった。

目の前には、一人の女性が倒れている。

その光景にはまるで現実感がなく、眠っているようにさえ見えたが、昨日まで染み一つなかったカーペットを染めあげている紅の色が、逃避しようとしている思考を引き戻す。

「」

僕は彼女の名前を呼ぼうとし、

呼ぼうとし、けれど何の音も紡ぐことが出来ず、口を閉じた。

知らない人という訳じゃない。この館にいる人間で、彼女を知らない人間などいないだろう。

「……誰、なんだ？」

けれど、わからなかった。

誰がこんなことをしたのか。そして　今床に倒れている彼女は誰なのか。

面識はある、生きていた頃の声も思い出せる、昨日だって普段通りに話した。

しかし誰も、彼女の名前を口にすることが出来なかった。

*

「なあクロ、まだ行く気にならないか？」

いつもの様に床に本を積み上げ、活字に溺れる様に大量の本を読むクロに問いかける。その質問を、クロは黙殺することで返事に代えた。

行く気にならないか？　というのは学校の事だ。

クロは元々外出を好まないが、ことに学校に行くのを嫌がる。簡単に言うとはチヒッキー状態なわけで。まあ、頭は切れるので授業

に出ずとも、テストは常にオール100という嫌味な奴だけだ。

ただ、学校の方には、クロが酷く人付き合いが苦手なこと以外にもそれなりの理由があって、それはおそらく先月の事件なんだろうと僕は思う。

先月の事件。クロを説得して、無理矢理学校に連れて行った時に『校内で』起こった、殺人。

皮肉なことに、犯人と被害者は今回初めて出来た友達で、クロは探偵だった。

クロの能力は両刃の剣だ。持ち前の推理の才を使って事件を解決に導くことは難しくないが、その際に触れざるを得ない、憎しみや哀しみなどの莫大な感情の渦は、同時にクロ自身をも傷つける。

要するにいくら言動などが大人びていようと、奴もまだ14才なのだ。少しばかり頭がいい程度のごくごく普通の少女。少なくとも、僕にとっては。こんな事を言くと、クロを知る人間はいいややと首を横に振るかもしれないけれど。

「まあいいさ、ゆっくりで」

あんな事件の起こった後なのだ。学校だってしばらく休みになったし、再会された今だって、休んでいる者はたくさんいる。

「しかし、極度の活字中毒だな。家にいる間はいつも読んでんのか？」

けれど、またもクロからの返事はない。適当な相槌すらない。

「おーい、クロ？ 氷鉋さん？」

沈黙。

ちよつとちよつと。もしかして最初からまったく聞いてないとか？ さっきまでの僕の思いやりは全部無駄だと？

「……。ここにルバーブのタルトと洋梨のタルトがある。10秒以内に答えたらどっちか選ばせてやるけどどっちがいい？」

「なによ、さっきからうるさいわね。ルバーブと洋梨？ そうね……」

負けた。ルバーブと洋梨に負けた。

意外に食べ物に弱いらしい。

「ルバーブがいい。紅茶があれば最高だけど」

そう言って、クロはちらりと視線をこちらに向ける。言外に紅茶を持ってこいと促してきた。

いいように使われてたまるものか。しかし、クロは無言で圧力をかけてくる。……ちよつと空気が肌に痛くなってきた。

いたたまれなくなつて仕方なく部屋のドアを開けたところで、階段を上ってきた小織さんと目が合う。

小織さんは柔らかい笑みを浮かべた。

「紅茶お持ちしましたよ」

なんて良いタイミングなんだ！ 僕はガッツポーズを取る。

小織さんは、氷鮑家の住み込みのメイドさんだ。

メイドといつても、別段メイド服を着ているというわけではないが。

「黒羽さん」

紅茶を部屋のテーブルに置くと、小織さんがクロに声をかけた。

「久々にお仕事です」

クロが本から顔を上げた。

仕事　つまり、クロのもう一つの顔である『黒猫』の探偵業。

今までクロが推理しているのを見たのは、偶然事件に巻き込まれたときばかりだったため、こんな風に依頼されて動くところを見るのは初めてだ。「どんな内容？」

「依頼人は漆島理子^{うるしま・りこ}。漆島家の血筋の方だそうです」

「漆島家……つてあの！？」

僕は思わず口を挟む。

「知ってるの？」

「噂には聞いている」

漆島。それは日本でも有数の大富豪の名前だ。

そんな家の人間が、クロに何を依頼したんだ？

「依頼人は山奥のお屋敷に住んでいるそうで、近々誕生日パーティ

「を開くそうです。そこで、是非黒羽さんに来て欲しいと」

それは依頼じゃなくて単に招待というのでは？

「遊びではないですよ。ちゃんとお仕事です」

僕の内心を見て取ったのか、小織さんが微笑みながら、ゆるりと首を振る。しかし、次の瞬間真面目な顔に戻り、こう言った。

「漆島さんはこうも言っていました。命を狙われているかもしれない、と」

「！」

その一言に、部屋の空気が僅かに張りつめる。そういうことは先に言ってもらいたかった。

突然『命を狙われているかもしれない』と言われても、普通ならまさか、という一言で一笑して終わるだろう。

しかし、僕らは知っている。

この世には本当に、命を狙う人間と、命を狙われる人間がいることを。

「依頼人が命を狙われていると感じた理由は？」

クロの質問に、小織さんは淀みなく答える。

「脅迫状が届くのだそうです。最初はただの悪戯だと思って気にしていなかったようですが、山奥の家なのにかなり頻繁に届くのと、段々内容が物騒なものにエスカレートしてきたそうで……。また、最近漆島の当主の容態が悪いようで、遺産争いから消すためかもしれない、と動機も十分です」

「なるほど、ね……」

小織さんの話した内容をしっかりと噛み砕いて記憶し、クロは頷いた。

「依頼人は、近日行われるパーティーへ招待した人物の中に、脅迫を行っている人物がきつと混ざっていると考えています。そこで黒羽さんに誰がその人物なのかを推理して頂きたいのです。大勢の人

がいる手前、犯人が行動を起こす可能性は低いでしょうし」

クロは数秒考えこむ。

「もう二つ……依頼人と一緒に住んでいる人はいる？ それと、脅迫状の宛名は？」

小織さんは頷いて口を開く。ちゃんとその辺の答えも用意しているようだ。

「依頼人と一緒に住んでいるのはメイドが二人だけで、脅迫状の宛名は無かったそうです」

「なるほど。それじゃあ、脅迫状が依頼人宛てであるとは断定出来ないのね。メイドに宛てたものであるというより、可能性は高そうだけ」

クロはちらりと僕を横目で見ると、真っ直ぐに小織さんの方を向いた。

「請けるわ」

「わかりました。そうお伝えします」

小織さんは微笑んだ。少しばかり嬉しそうに。

小織さんの気持ちも少しわかる。少し前までは推理すること自体に乗り気じゃなかったクロがようやくやる気になったのだ。

クロが前の事件を乗り越えられるようになるのなら、僕も嬉しい。「立森さんはどうします？」

「え？」

小織さんの質問はちよつと予想外だった。

僕は推理に関してはただの一般人であつて、体質上、色々な事件に遭遇した経験はあるけれど、解決は出来ない。

話を聞いた以上、興味が無いわけじゃないけれど。

「僕も行つていいんですか？」

「立森さんが行きたいなら構わないと思いますよ。ですよね？」

「……どっちでも」

クロは曖昧に返事をした。判断は僕に任せるらしい。
さて、どうしよう。どうせ冬休みで暇だし、場所は漆島家のパー
ティー、悪くはない。

遊びがてら、クロにちょっと訊いてみる。

「来てほしい？」

「別に。全然来なくていい」

こいつが絶対にこう答えることはわかっている。僕はにやりと笑
ってみせた。

「よし、決めた。行く」

「な……っ」

「決まりですね」

ぱん、と小織さんが手を打った。

「日時は来週の日曜。夕方頃にお迎えに行きます」

「よろしく願います」

にこにこ話を進める僕と小織さんを、少々苛ついた様子でクロ
が眺めていた。

「来なくていいってば」

「本当に？」

「……いい。本当にいい。むしろ来るな」

普段が無表情なやつをからかうのは非常に楽しい。

これ以上やると本当に今回の件から閉め出されかねないので、こ
れくらいにしておくが。

僕は、忘れられてすっかり冷めた紅茶を手に取り、一口する。

うん。苦いものなら事件じゃなくて紅茶の方がいい。

一話：探偵は依頼される（後書き）

作中の「前の事件」については「Detective Cat -
Where is the right answer?」の
内容となっております。

二話：主人は招く

「山奥とは聞いてたけど、ずいぶん遠いんだな」

あれから一週間。僕らは車に揺られながら、ひたすらに山の中を進んでいた。向かう先は、依頼人、漆島理子^{つるしま}氏の家。

運転手は小織^{こおり}さんだ。家事全般からヴァイオリンまでなんでもこなすこの人は、運転まで出来るらしい。しかも、結構上手い。

……これだけ能力があれば、働き口なんていくらでもあっただろうに、なんで氷匏^{ひがの}家のメイドを選んだんだろう？

「あ、兎」

唐突にクロが指差した。

車酔いを起こしてしまうため、今は本を読んでいない。

「え？ どこ？」

「そっち。木の脇に足跡があるでしょ？」

僕はあたふたと、慌てて眼鏡を取り出す。

しかし、急いでかけたとはいえ、車の外にずっと同じ景色が広がっているはずもなく。

「あー……。遅かったか」

「残念ね」

いたわっているようには全然聞こえないが、こういう奴だ。

「眼鏡なんてかけてたの？」

「たまにな。授業中とかだけ」

ゲームのやりすぎでかなり視力が落ちてしまった。当分は自粛しないとな。

だがまあ、しかし、そう悲観することもない。なんていったって、最近では眼鏡男子がはやっているそうじゃないか！

「……変な夢は見ない方がいいわよ」

ほっといてくれ。

「まだかしら……中々暇だわ。かといって本を読んだら酔うし」

「もうすぐですよ。あ、ほら、見えてきました」

小織さんの示した方向を、僕は窓に頭をくつつける様にして覗き込む。

「え？」

「赤い屋根が見えるでしょう？ それですよ」

いやいやいや。確かに赤い屋根は見える。眼鏡をかけているので間違いない。でも、あれは家というより。

「館！？」

そう、依頼人宅はどう見ても、どう考えても館だった。

安易に家と呼ぶのは、はばかられる。

氷鮑邸だって大きいが、この館はそれを遥かに凄いでいた。

この館に漆島さんとお手伝いさん二人の三人暮らし？ なんと贅沢な。

漆島の名も伊達じゃないということらしい。

「っ！？」

僕が漆島さんの館にため息をついた、その時だった。

小織さんが急ブレーキを踏む。衝撃で僕は前につんのめる。とっさにクロの方へ腕を伸ばしたが、間に合ったかはわからない。

冬道でありスピードは出していなかったのが幸いだった。

「どうしたんですか？」

「すみません、道路脇から突然」

鹿でも飛び出してきたんだろうか？

フロントガラスへ顔を戻した僕は、事態を理解する。小織さんの次の言葉を待つまでもなかった。

単純なことだ。これでは誰だって急ブレーキを踏んでしまう。

車の前には、腕を広げて仁王立ちする人の姿があったのだから。

*

その人物は、運転席に向かって歩いてきた。僕やクロと同年くらいだろうか。短い髪。真っ白な雪の中で、迷彩柄のジャケットが目をつけた。

「ちょっとお訊ねしたいんですが」

その声で、相手が女の子だとわかった。服装や髪型のせいで、外見だけでは男と見間違えてしまう。

「この辺に漆島って人の家があるらしいんですが、知りませんか？」
「……」

小織さんが少し言い辛そうに赤い屋根を指差す。

「あの赤い屋根の建物です。私たちも今行くところなんです……」
その言葉を聞くなり、女の子はぐりと凄じ勢いで横に顔を向けた。横　僕らから見れば前方に位置する、赤色の車まで。

「親父！」

車の中の人物が、慌てた様に外へ出てくる。大柄な中年の男性だった。親父、と呼びかけたところを見ると、あの子の父親だろうか。女の子が怒りながら、漆島さんの館を指差すと、参ったというように頭を抱えた。

男性は小織さんに頭を下げる。

「すみません、酷い方向音痴でして……。これから漆島の家に行くところといたしましたね？　招待客の方ですか？」

「はい、小織といいます。後ろの方々は」

「そうでしたか！　私は理子の兄で、漆島晶一（つるしま・しゅんいち）といいます」

小織さんの言葉を最後まで聞かないうちに、男性はぱつと顔を輝かせて、そう言った。

漆島？

小織さんが僅かに驚く。僕もだ。

とはいえ、僕らの他には兄妹、姉妹しか招かれていないはずだから、漆島さんの館に用があると聞いた時点で、兄妹であると気づいても良かったかもしれない。

依頼人の兄　脅迫状の送り主と疑われている人物の、一人。

「気さくな人、って感じの印象だけだな。どう思う？ クロ」

見かけで人は判断できないということは、今までの事件で嫌と言
うほど思い知らされているのだけれど。

「……シロ」

「ん？」

何故か下の方から声がする。

あ。忘れてた。

振り向くと、僕に思い切り頭を押さえつけられて、窮屈そうに
しているクロがいた。

「……急ブレーキで危ないかなーと」

慌てて手を離し、距離を取る。クロは無言だった。

無言だが、

視線が針のようだ。

なるほど。確かに、目は口ほどにものを言うらしい。

「悪い悪い。……すいません」

なんだか最近、どんな僕の立場が弱くなっているような気がす
るのは気のせいだろうか。

「どう思う？ も何も、外なんか全然見えなかったわよ」

文句を言いつつ、クロは窓の方を向いた。丁度、小織さんとの話
を終えた晶一さんが、自分の車に戻っていくところだ。

クロは猫のように目を細めて、じっとその様子を見つめる。視覚
から得た情報を、記憶へと記録する。

「かなり体格がいいわね……。雪の分を差し引いても180くらい
……。がっしりしてるけど、太っているわけじゃない。筋肉質？

ジャケットの分があるし、後ろからだから正確には言えないけれど、
何か格闘技の心得がありそう。それも、現役レベルで」

「へえ……」

晶一さんについて、それだけのことをクロは一瞬で見抜いてみせ
た。やはり、ホームズとワトスンでは目が違う。

「小織さんに言ったのよ」

「ぐっ」

結構根に持つタイプなんだよなあ、こいつ。

＊

もし。

僕が超能力者でこの後の事を予知できたなら。そうしたら、僕はこの館には入らなかったかもしれない。或いはそれでも入ることを選んだのかもしれないが。

僕はここに入ってはいけなかった、というのが正しかったんだろうと思う。

＊

車を降りると、痺れるような寒気が体を刺す。痛みを伴う寒波。刺す、という表現はあながち比喻というわけでもない。

先に車を降りていた晶一さんが、笑顔で僕らに再び礼を言った。

「いやあ、ホントにありがとうございます。いつまでも迷っているところでしたよ。おや？ そちらの方々は……」

「まったく、そそっかしいんだよ親父は。さつき道を教えてもらった時に、えーと……小織さんが紹介してくれようとしたのに、さえぎって自己紹介なんか始めちゃってさ」

晶一さんの娘さんらしい女の子が、不機嫌そうにそう言った。そういえば、この子の名前も教えてもらっていない。

ひがの・くれは

「氷鉋黒羽です」

たちもり・しんろう

「あ、立森司狼です」

うるしま・まひろ

「俺は漆島真恢。呼び捨てでいいよ。14だけど、同い年？」

クロが簡潔に頷いて返事をする、真恢は嬉しそうに破顔した。

そういう表情は晶一さんにちょっと似てるかもしれない。

雪の厚く降り積もった中にある、一筋の雪掻きされた道を辿っていくと、館の入り口に出た。

「間近で見ると一層凄いな……」

ホワイトハウス？

洋風の外見が雪のせいで白くなって、余計にそう見える。

小織さんが代表してインターホンを押した。こんなに大きな館でも、インターホンは普通なのだから、変な感じだ。

なんだか、初めて氷鉋邸に行ったときみたいだな。

あのときは、氷鉋という字が読めなくて、20分ほどつろつろと迷ってたんだっけ。

そうやって回想に浸っているうちに、インターホンから返事があった。

「氷鉋、立森、小織です」

「かしこまりました。今お開けいたします」

数秒後、門の奥から鍵を開ける音がして、観音開きの扉が開いた。「いらっしやい、探偵さん。どうぞ上がって」

中から出てきたのは、シンプルな紅いドレスに身を包んだ女性だった。僅かにカールしている薄茶の髪の毛がドレスの色に映えている。

年齢は30から40くらいだろうか。なんとなく所帯じみたところがない、自由奔放な雰囲気は、見ようによつては20代にも見せしてしまう。

もしかしてこの人が……。

それに応えるように、女性は僕らに微笑む。

「私が漆島理子よ」

クロが代表して、前に出て挨拶をする。

「氷鉋です」

パーティーということで、僕らも一応は正装だ。僕は無難に制服のようなブレザー姿で、クロはいつものように、黒い色で決めている。

僕はちらりと迷彩柄のジャケットを羽織った真恢を見た。真恢は漆島一族だからいいんだろうか……。

「奥様！ 私たちがお開けしましたのに……」

ぱたぱたと、奥から誰かが走り寄って来る音がする。

「いいのよ、近かったから。紹介するわ、探偵さん。うちでメ

イドをやってもらってる、柚子と涼すずよ」

「ようこそいらっしやいました」

その綺麗にタイミングの合わさった言葉は、二人分。

少し袖の膨らんだ、裾の長いエプロンドレスが目を引く。髪は後ろで邪魔にならないようにまとめてあり、正確な長さはわからないが、ほどけば結構長いんじゃないかと思う。

扉を開けたのは、二人のメイドさんだった。外見の、まったく同じ。

依頼人の他にお手伝いさんが二人いると聞いていたけれど、まさか双子だったとは。

「小波と申します。何か不自由がありましたら、お申し付けください」

柚子さんと涼さんは僕らに向かって一礼する。

隅々まで揃えられた動作だ。しかし、ここまでぴったりと息が合っているのは、訓練によるものというよりは、双子という生来要素によるものなんだろう。

同じ人間が二人いるのではないかという錯覚。二人を見分けるのは至難の業だ。

「左が姉の柚子で、右が妹の涼。そうよね？」

小波さんは頷いた。

ええと、右にいる、今こめかみを軽く擦るような動作をしたのが、柚子さんで……。ん？ 反対か。涼さんだ。

メイドという職業柄、服装や髪型も同一なので、余計に見分けづらい。

僕がじつと二人を見比べてみても、共通点は山ほど見つかりこそすれ、違っているところはまるで見つけられない。

「漆島さんはいつも、どうやって見分けているんですか？」

「そうねえ、私は……やっぱり秘密にしておきましょう。ここに
いる間に考えてみて」

理子さんはいたずらっぽい微笑みを浮べて、僕とクロにそう言っ
た。

「二人は本当にそっくりだから、長い間一緒にいる私でも、たまに
間違ってくるの。探偵さんがどうやって見分けるのか、興味ある
わ」

クールそうに見えて、クロは中々に負けず嫌いだ。この手の挑戦
を受けないはずがない。

理子さんの言葉を快諾しながらも、双眸は既に、観察と分析を始
めていた。

「さあ、こんなところで立ち話もなんだから、入って入って。寒い
でしょう」

実を言うとかかなり寒かった。赤くなったむき出しの耳は、寒波に
そのまま千切れてしまいそうで、僕は素直にお言葉に甘えること
にした。

「おじゃまします」

かくて僕らは、雪山に佇む銀色の館に、自ら足を踏み入れること
となる。

二話：主人は招く（後書き）

大変間が空いてしまい、本当に申し訳ありませんでした。
徐々に時間が取れつつありますので、更新頑張ります。

三話：人々は揃う

「おじゃまします」

「あ、えつと、靴は……」

理子さんはくすくす笑った。

「そのままでもいいのよ。雪はそのマットで払ってね」

家の中に入ると、外のものとは全く違う暖気に包み込まれて、一瞬にして眼鏡がくもった。僕は眼鏡を外して、元通りケースに戻す。絵のたくさんかった、長い廊下だった。絵はそれぞれ一定の間隔を保って置かれており、窓の端に被さるときは、その部分だけ枠ごと絵を切り取ってでさえ、その法則は頑に守られている。

歩いていると、じわじわと耳や指の先が温まってきた。外側だけが早く温まるので、痺れるような、変な感じだ。この感覚は嫌いじゃない。

「今日は来てくれて本当にありがとう」

「いいえ。こちらこそ私をお招きくださってありがとうございます」
もちろん、ここでいう『招く』とは、パーティーに呼んだ事そのものではない。クロは、依頼という言葉を招待と置き換えた。

軽々しく依頼などという単語を持ち出して、他の人に感付かれてしまつては元も子もない。幸い、理子さんはすぐに気付いてくれた。クロの言葉に複雑な表情で頷き、そして小声で続ける。

僕ら以外に聞かれてしまうことを考慮してのことだろう。晶一さんと真恢まひろは、二人して大声でまた喧嘩しているので、聞かれる心配はない。

「ええ。でも本当は、脅迫状の送り主があの中にいないことを証明してほしいの。やっぱり兄妹だもの。お金に固執するような人たちだとも思えないし……」

その言葉を聞いたクロは、訝しげに少しだけ眉根を寄せた。

「……ご兄妹の調査を依頼されたのに、疑うどころか信じているよ

うにさえ見えます。依頼に至った要因は何ですか？」

「脅迫状の送り主を自分なりに考えると、どうしても彼らの疑いが濃くなってしまうのよ。そもそも私はあんまり人と関わる事がないから、疑わしい人も少ないしね……。仕事上の人々にしたって、この住所を知っている人がまず、ほとんどいないはずなのよ。もうほとんど我が家のようなものだけど、ここはあくまでも仕事場だから、親しい人以外には教えていないから。それと、柚子と涼の薦めも大きいかな」

理子さんは苦笑する。脅迫状なんて嫌なものをずっと送られ続けていれば、疑心暗鬼になるのも仕方ないだろう。たとえそれが、家族を疑う結果になってしまっても。責められるべきなのは犯人ただ一人だ。

「お願いね、探偵さん」

「全力を尽くします」

相変わらず言い方は素っ気ない。

でも、それはおそらく、理子さんからの依頼を満たすための最良の方法を考えているからだろう。

そして丁度、廊下は終わりに差し掛かる。

玄関と同じ、両開きの扉。柚子さんと涼さんがそれぞれドアの取っ手を握った。

この館の扉に両開きが多いから双子を雇った、なんてことはあるわけがないが、綺麗に左右対称になったその光景は、この館の雰囲気 に妙に似つかわしい。

二人に引つ張られ、歓待の軋みをあげながら、扉はゆっくりと開かれる。

「当家自慢の大広間よ。とはいえ、ここは元々は別荘だったから、本物の館には負けるけどね」

理子さんが楽しそうに微笑んだ。

僕の目線はただ、その大広間に釘付けになっていた。

テレビの中やホテルでしか見たことのない、細長いテーブル。

この大広間にも、部屋をぐるりと取り巻くように大量の絵がかけられていて、いくつかの絵の手前に置いてある花瓶は、ご丁寧に絵とまったく同じになるようにアレンジされていた。

そしてとにかく、広い。

僕は自分の狭い部屋が何個入るだろう、と考えて虚しくなった。

「うわー、やっぱり広いな、おばさんのところは」

それまで晶一さんと口喧嘩をしていた真恢が、感心した声をあげる。

そのまま部屋を見渡していた僕は、ふと、それと目があった。

「!？」

にやりとした笑みを貼り付けた顔で見つめ返してきたのは、僕と同じくらいの大きさの人形。スーツ姿が妙に不自然だ。

しかしその朗らかな顔や、白いひげはどうみても。

「サ、サンタさん？」

「ふふ、可愛いでしょ。うちではクリスマスの後はスーツに着替えて、私の誕生日まで飾っておくのよ」

怖いです。

「あら、皆来たのね」

そのとき、部屋の奥から女性の声がした。

入ってきた女性は、全身を黒い色でコーディネートしていた。歳は20代後半くらいだろうか？ 目元が少し、理子さんや晶一さんに似ているかもしれない。

「妹の漆島^{うるしま・とも}智です。よろしくね」

智さんは同じく黒ずくめのクロを見つけると、気が合いそうね、と微笑んだ。

僕らはぺこりと頭を下げ、軽く自己紹介をする。

「皆集まっ たみたいね」

僕は、周りを見回す。

依頼人、漆島理子さん。

その兄、漆島晶一さん。

晶一さんの娘、漆島真恢。

理子さんの妹、漆島智さん。

そして双子のメイド、小波柚子さんと、涼さん。

全員、集まった。この中に、はたして脅迫状の犯人はいるのだろうか。

*

理子さんの誕生日パーティーは、おおむね順調に進行した。

もちろん、色んな人と談笑しつつも、情報収集は拔かりなかった。依頼のことは忘れていない。クロは人と関わるのが苦手だと言っている割に、話術は中々巧みだ。

「何か見当はついたか？」

「帰ってからもちよつと調査が必要ね」

「帰ってからも？」

「元からそういう計画になってるのよ。今日はとりあえず対面。この情報量が少ない場ですぐ犯人を見極められたら、私の背後には神がいるわね」

クロの言い分によると、理子さんを脅迫することによるメリットが見当たらないそうだ。

あえて挙げるとするならば、理子さんが言っていたとおり、現漆島当主の遺産絡みだが、晶一さんも智さんも金銭面で悩んでいる様子はない。それに、直接的な力によつて強制的に理子さんが遺産争いから排除されたとして、そのときに困るのは晶一さんと智さんなのだ。遺産争いという状況下で誰かが事件に巻き込まれようものなら、残った者に疑いがかかることは間違いない。

仮に遺産とはなんの関係もない、怨嗟での脅迫だったとして、同じ理由で今理子さんを脅迫することは得策ではない。要するに、利点どころかデメリットしか浮かばないのだ。

どうしてこのタイミングで犯人は脅迫状を送ったのか。

それじゃあ、この場にいる人物以外の犯行なのか？ それならば、この館についての情報はどこから得た？

「んー」

僕なりに頭を絞ってみるが、答えが出るはずもなく。

やめた。大人しくデザートでも食べていよう。

食べ物豪華で、美味しくて、僕が来るのは場違いだったんじゃないかと心配になる。

もちろん、これだけの大人数。柚子さんと涼さんは忙しそうで、小織さんが手伝いに回っている。一応は客人ということで、柚子さんと涼さんは最初断ったが、「私もメイドをしていますので」という小織さんの言葉が効いたようだ。それでもまだ三人の動きは忙しないもので、僕らも少し手伝った方がいいかもしれない。

「そういえばクロ、柚子さんと涼さんの見分け方、わかったか？」

「ああ……。ざっと見た中で違うところといえば、片方の靴紐がほどこていることくらいかしら」

「そういうのは教えてやれよ」

まったく、頭はいいくせに、一般常識から微妙にずれている。

「靴紐、ほどこてますよ」

「え？ あ、本当。私は姉さんと違ってそそっかしくて……。奥様もきつと靴紐がほどこてたせいで見分けがついたのね」

小波さんは、靴紐に目を落として、こめかみを下から上にこするような仕草をした。

姉さんと違って、ということは涼さんだろうか。

涼さん（推定）は紐を手に取り、素早く蝶々結びを作る。

ん？

「どうかした？」

「あ、いえ……」

なんだろう。何か違和感があった。

とはいえ、それはかなり漠然とした、ほとんど直感に近いもので、その正体を突き詰めようとすればするほど、さっきの感覚は本当だ

ったのかどうか怪しくなってくる。気のせいだったのだろう、と思うことにした。

「涼。手が止まってるわよ」

「あつ、ごめんなさい」

てきぱきと手を動かしながら、小波さんが声をかけた。涼、と呼びかけたので、消去法で柚子さんだ。

「何か手伝えることはありませんか？」

僕の申し出に、柚子さんはゆるりと首を振る。

「ありがとう。でも、お客様に手伝わせるわけにはいかないわ。そうだ、後でいいところに案内してあげる。氷鮑さんは本が好きみたいだし、きつと気に入ると思うわ」

横で聞いていたクロが、ひょいと顔を上げた。本好きが気に入るということは、少なくとも本に関係する部屋だろう。書庫か何かだろうか。

「でも……」

「それに、仕事を邪魔しちゃいけないですもの」

そういえば、理子さんが依頼に踏み切ったのは、柚子さんと涼さんの薦めもあったと言っていた。当然、事情は知っている。

結局その場は、柚子さんの好意に甘えることになってしまった。

四話：『誰か』は瞼を開かない（前書き）

遅筆のせいで現実時間と時間軸が大分ずれてしまいました。
作中の時間は1〜2月くらいとなります。

四話：『誰か』は臉を開かない

「奥様。氷鉋様と立森様を、書庫へお連れしてよろしいですか？」

「ああ、それはいいわね。私も行くわ」

柚子さんの言っていた本好きの気に入る場所とは、やはり書庫のことだったようだ。

クロは相変わらず表情に出さないが、足取りがなんとなく嬉しうだった。

入ってきたのとは反対側にあるドアから大広間を出て、廊下を歩く。廊下にもまた、大量の絵がかけられていた。風景画や静物画が主で、人物画はほとんどない。

「ここです」

外見は何の変哲もない普通のドア。

しかし、その中身は中々に特別だった。

入ってまず目に飛び込んでくるのは、ずらりと並んだ本棚。さすがに図書館には及ばないが、個人の所有としてはかなり多い。

脇にはソファと小さなテーブルがある。さらに、毛足の長い絨毯は足音を吸収するので、静かに読書が楽しめそうだ。

うーん、欲しいなこの空間。

テーブルの上には、模様の付いた透明な小鉢が置いてある。いや、違うな。もしかして……。

「クロ、あれって灰皿か？」

「そうみたい。クリスタルガラスだから、結構重量があると思う」

へえ、綺麗な灰皿もあるもんだ。煙草の灰を落とすのがもったいなくなるな。もちろん、僕は吸わないけど。

「それにしても、すごい蔵書ですね」

「主に父のものなの。あとは、智が自分の家に置ききれなくなったものを持ち込んでくるわね」

智さんは読書好きなのか。黒い服を好むところといい、ますます

クロと気が合いそうだ。背中の中程まで伸びた長い髪も、そういえば似ているかもしれない。

クロはすいっと本棚の前へ移動すると、その眼を持ってして、じつくりと物色し始める。

「この本なんか、奥様が好きですよ」

小波さんが、ソファに面した本棚の中段から、一冊抜き取った。箱に収められたそれは、辞書のように重厚だ。続き物らしく、同じデザインの箱がいくつも並んでいる。

一体、柚子さんと涼さんのどっちだろう、と考えていた時のことだった。

「あつ」

何しろとても重い本。取り出そうと逆さまにした箱から受け損ねた本は、小波さんの手から床へと滑り落ちていく。

小波さんが慌てて受け止めようとするが、どうあがいたところで間に合わない。

ばさり、と本が絨毯に着地した、その瞬間。

「柚子！ 涼っ！」

空気を切り裂くような鋭い声で、理子さんが一喝した。

名前を呼ばれた二人の小波さんが 本を落とした方もそうでない方も びっくりと肩を震わせる。

「気をつけなさいといつも言っているでしょう」

「す、すみません」

小波さんは顔面蒼白な様子で、急いで床から本を拾って元通り箱にしまい、慎重に本棚へ戻した。

「ごめんなさい、お客様の前で」

額に手を当てて、苦い顔をしている理子さんが、一言そう謝った。
「いえ……大切なものなんです」

「ええ。とてもとても大事。あの本に何かあったらすっごく怒っち

やうわよー……って、今まさに怒った後ね」

僕は曖昧に笑った。大事なもののために怒るのは、まあ、仕方がないだろう。

少し気まづくなってしまうた雰囲気を払拭しようと、話題を探した。

「そういえば、理子さんはなんのお仕事をされてるんです？」

「ふふ、なんだと思う？」

逆に聞き返された。問いかけるのが好きな人だ。きっと、これは当ててみるということなのだろうと解釈する。

そうだな……。

「画家、ですかね……」

「理由は？」

「この館に入って最初に目に付いたのは、壁にかかった大量の絵でした。それだけならまだしも、狭いスペースに収めるために、一部分を額ごと切り取った絵まであります。せつかくの絵を切り取るということは、あまりしないと思うんですよね……。もらったものや買ったものなら尚更。それなら自分で描いたものなんじゃないか、と思ったんです」

理子さんは猫のように目を細めて、面白そうに笑った。

「ほぼ正解、かな」

よし！

クロと会ってから、周りを観察する癖がついた。あいつほど上手くはないけれど、毎日の積み重ねが物を言ったのか。

でも、ほぼ？

「一つだけ惜しいかな。実は、あの切り取った絵だけ、私の描いたものじゃないの。他人の絵だから、切り取れたのよ。自分の絵を切り取るような真似はしないわ。壁の汚れ隠しにでも使ってください、って謙遜するものだから、本当に使っちゃった。あ、壁に汚れはないわよ？」

「……」

さいですか。

「さつきも言ったと思うけど、ここは元々別荘でね。子供の頃たまに遊びに来ては、自然が本当に綺麗だなあ、っていつも思ってた。だから、ここが私の仕事場なの。一年のほとんどをここで過ごしているから、もう家のようなものね」

「寂しくなったりとか、しないんですか？」

柚子さんと涼さんがいるとはいえ、この館は外界から隔離された世界だ。いくら景色が綺麗でも、人恋しくなったりは、しないのだろうか。

「全然大丈夫よ。皆でわいわいやっているのも楽しいけれど、私は一人が一番好き。この仕事はまさに天職ね」

「そうなんです。クロと……えっと、氷鮑と気が合いそうですね」
今更黒羽と呼ぶのはなんとなく気恥ずかしく、氷鮑にしておいた。

「黒猫さん？ うーん、あの子は……一人が好きというよりは、一人が楽、って感じに見えるけど……」

僕は理子さんを見返す。好きと、楽。その二つの間にはどれほどの違いがあるのだろう。その時の僕には、まだわからなかった。

クロが物色していた本を戻して、壁の時計に目をやる。

「もうこんな時間。そろそろおいとまさせて……」

「今日はおすすめないわね。部屋はたくさんあるから、泊まっていて構わないわ」

涼さんが開けたカーテンによって、理子さんの言葉の意味を、僕はすぐに知る。

「うわ、吹雪……！」

酷い吹雪だ。夜闇でもわかる。外に出たら、あっという間に視界を奪われるだろう。

「夜道でこの天候は、無謀ね」

泊まっていけ、という理子さんの言葉をクロは最初断ろうとしたようだったが、この暴風雪を見せられては、考えを改めざるを得なかったらしい。

「たしか来客用のパジャマもあったはずだから、大丈夫よ。柚子、涼、すぐに用意してくれる？ あと部屋も。他の人にも知らせた方がいいわね。私は一旦大広間に戻るけど……」

「あ、僕も行きます。クロ？」

僕の呼びかけにクロは頷いて、書庫を後にした。

*

「本当によろしいんですか？」

保護者的役割である小織さんが念を押す。

「ええ。この天気じゃ遭難してしまいますよ」

雪は時間と共に勢いを増し、治まる気配を一向に見せない。行くときはあんなに晴れていたのに。山の天気は変わりやすいって、本当なんだな。

「ほー。少しくらいなら可愛いもんなのに、これだけ降ると、見るだけでうんざりしてくるな。明日には俺と同じ大きさの雪だるまが作れるかな？」

真恢まひろがのんきな事を言う。

「作れるんじゃないか？ むしろ、僕の身長くらい積もってるかも」男である僕が『僕』という一人称を使っているのに対し、一応は女の子である真恢の一人称が『俺』とは、中々シニールな光景だ。

「その時は手伝えよ、僕っ子」

「……僕っ子言うな」

この俺っ娘め。

まあ、見ていただけでうんざりする、という真恢の意見には同意だった。理子さんの愛する端麗な景色も、きっと明日には白一色に塗りつぶされているだろう。もっとも、理子さんはそんな雪景色でさえ、愛しているのかもしれないが。

僕はため息をつく。今はただただ、雪が降り積もっていくのみ。その真っ白な世界に、僕らを閉じ込めるように。

「……」

うーむ、どうにも眠れない。

枕が変わると寝られない、とかいう繊細な神経はしていないはずなのだけれど。

完全に目が冴えてしまったので、僕は気まぐれに一階へ降りてみた。

夜の館は、一層雰囲気が出る。いまなら絵の中が動いてもおかしくないような気さえした。

その時。

「どうかしましたか？」

「わあああああつ！？」

「きゃあ！？」

しまった、思わず大声を上げてしまった。

振り返ると、小波さんがいた。パーティーの後片付けをしていたんだろうか。

「すみません、驚かせてしまつて」

「いいえ、私の方こそ。眠れないんですか？」

「そんな感じです。小波さんは後片付けを？」

小波さんは頷いた。「でも、私の仕事はほぼ終わりです。涼は、あつちに」

ということは、柚子さんか。柚子さんは、目の前にある鏡を指差した。

鏡には、作業をしている小波さんが映っている。右手に持った鋏で、絵の前に飾ってある花の、枯れた部分を切り落としているところだった。

「姉さん、もう終わったの？ ……あ、立森さん。こんな時間にどうしました？」

僕はさつきと眠れなくて、と答える。

「寒いのかもしれませんか。ええと、確か……あつた、あつた。どうぞ」

「カイロ？」

涼さんはにつこりと微笑む。

「家の中でも寒いときは使うといいですよ」

「ありがとうございます」

確かに、少々寒気が気になってはいた。少しでも暖かくすれば眠りやすくなるかもしれない。

「ふう……姉さんは作業が早くて羨ましい」

「涼が遅いのよ」

見た目にはまったく区別がつかない二人だけれど、当然というか、中身までそっくり同じとはいかないようだ。

明日、帰るまでには見分けられるようになるだろうか。

僕は二人に挨拶と礼を言っ、部屋に戻ることにした。

*

「……」

まだ寝ぼけた目に、見慣れない景色が飛び込んでくる。

自分の家のものとは違う匂いの布団。そうだ、まだ理子さんの館にいたんだった。

起き上がろうと布団から出した肩を、ひやりとした冷気が撫でた。館の中にはちゃんと暖房が入っているが、それでも朝の冷え切った空気は、それを軽々と凌駕する。

涼さんにもらったカイロは当然、冷たくなっていた。

昨日の雪は一体どれほど積もったのだらうと、窓から外を覗いてみる。

ん？ 変だな。

ここは二階なのに、地面が妙に近く見える。

「……！」

それが高く積み上がった雪のせいだと気づくのに、僕の頭は少々
の時間を要した。

半ばまで雪に覆われた周りの木々が、雪の深さを物語っている。

せっかく柚子さんと涼さんがつけた館までの道筋が埋まってしま
った。いや、それだけじゃない。小織さんと晶一さんの車も掘り起
こさないといけないかもしれない。

その時、コンコンと軽快に、ドアを叩く音がした。

「シロ、起きてる？」

「ああ、今起きたところ」

僕をシロと呼ぶ人物はただ一人。そんな特徴で確認をしなくても、
付き合いもそれなりに長くなってきたから、声の調子でそれがクロ
だとわかるけど。

「小織さんの車、埋まったかも。手伝って」

ああ、やつぱり。わかった、とクロに告げると、手早く身支度を
して部屋から出る。

朝の館は、昨日の喧騒が嘘のようにしんと静まりかえっていた。
その静けさは壁に飾られた多くの絵と相成って、まるで美術館の一
画のような雰囲気を作っている。

一階は僅かに薄暗い。窓を埋めんばかりの勢いで、雪が積もった
からだ。

重労働になりそうだ、という想像が歩調を遅らせる。

それは、左足が床に着いたのと、計ったように同じタイミングだ
った。

「！？」

耳をつんざくような異様な音が　いや、『声』が、静寂なその
場を唐突に満たした。

平常な人間が平常な場では、けして出せない異質な音階。

黒板を思い切り爪で引っかいた時のように、その声は背筋を冷たくする。

書庫だ。

間髪を容れず、クロの足が床を蹴る。

クロは、書庫のドアノブを掴むと、迷わずそれを開け放した。

「あ……ああ あ」

部屋の中で腰を抜かしている声の主は、全身に黒い服を纏っていた。智さんだ。

「大丈夫ですか？ 一体何が……」

智さんの視線の先。そこには。

駆け寄った僕らは、それに気づかざるを得ない。

ざり、と頭の中でノイズが鳴る。

智さんの奏でる声の調べと相成って脳をかき乱す、なんとも狂った不協和音。

ああ、嫌な色だ。

赤い。紅い。朱い。

昨日まではなかった色が、カーペットを染めている。そしてその上の本棚と、その中に納まった本を。ああ、あれは理子さんの大事な本入っている本棚だったな、と僕の頭はこの状況でそんなことを思い出していた。

本棚にもたれかかるようにして倒れている、色の根源たる人物。

「」

僕は彼女の名前を呼ぼうとし、

呼ぼうとし、けれど何の音も紡ぐことが出来ず、口を閉じた。

知らない人という訳じゃない。この館にいる人間で、彼女を知らない人間などいないだろう。

「……誰、なんだ？」

けれど、わからなかった。

誰がこんなことをしたのか。そして 今床に倒れている彼女は誰なのか。

面識はある、生きていた頃の声も思い出せる、昨日だって普段通りに話した。

小波さん。あなたは、柚子さんなのか、涼さんなのか。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3264d/>

Detective Cat -Who am I?-

2010年10月11日18時42分発行